

令和 4 年 5 月 20 日現在

機関番号：14401

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2021

課題番号：17K02593

研究課題名(和文) ブルーストにおける音楽受容と小説創造

研究課題名(英文) Musical reception and novelistic creation in Proust

研究代表者

和田 章男 (Wada, Akio)

大阪大学・文学研究科・名誉教授

研究者番号：00191817

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,900,000円

研究成果の概要(和文)：マルセル・ブルースト(1871-1922)の大作『失われた時を求めて』には架空の音楽家ヴァントウイユの作品が重要な役割を持つだけでなく、実在の音楽家についての批評言説が数多く見られる。草稿・書簡の調査によって作家の音楽聴取・受容の様態を明らかにするとともに、第三共和政下のパリにおける音楽演奏の記録、新聞・雑誌等の音楽評論の調査を行い、ブルーストの音楽観を音楽批評史の中に位置づけることによって、その独自性のいくつかの側面を明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は世界的に多くの研究が行われるとともに日本でも多大な関心が持たれているフランス人作家マルセル・ブルーストの大作『失われた時を求めて』が文学・芸術論の小説化であるという観点から、特に作家の音楽受容と小説創造の関係を追求する。報告者が長年調査してきた草稿資料に基づき実在の音楽家や音楽作品がいつ、どのように小説に導入されたかを問うことによって文学テキストの「内」と「外」を関係づけるとともに、文学と音楽という異なるジャンルにまたがる分野横断的研究としての意義を持つ。

研究成果の概要(英文)：A la recherche du temps perdu, a great novel by Marcel Proust (1871-1922), in which the work of Vinteuil, a fictional musician, plays a significant role, includes numerous discourses on real musicians. The examination of the writer's manuscripts and correspondence has enabled us to shed light on the modalities of his hearing and his reception of the music. We have also researched documents of musical performances and articles in the press in Paris under the Third Republic in order to clarify certain aspects of the originality of Proust's musical ideas by situating them in the history of musical criticism.

研究分野：フランス文学

キーワード：ブルースト 『失われた時を求めて』 音楽受容 文学と音楽 草稿研究 生成研究

1. 研究開始当初の背景

本研究はブルースト研究およびフランス近代文学研究の二つの潮流、すなわち草稿資料に基づく文学テキストの生成過程の研究と、文学作品を歴史的・文化的コンテキストに位置づけ解釈する文化史的文学研究を学術的背景としている。

(1) 草稿に基づく文学テキストの生成研究は、1970年代にブルーストの草稿帳、タイプ原稿、校正刷り等がフランス国立図書館に所蔵・公開されてから活発に行われ、作品成立過程の大筋が判明してきた。報告者も博士論文等によりブルーストの小説の生成研究の一端を担ってきた。平成18～20年度の科学研究費補助金(基盤研究(C))「ブルースト草稿資料における固有名の調査と索引作成」、課題番号18520202)により75冊の草稿帳の固有名総合索引を作成し、草稿調査の利便性を高めるとともに、本研究における音楽家調査を進める土台となった。

(2) 文化史的文学研究は、文学作品を同時代の歴史的・文化的コンテキストに置くことにより、テキストの失われた意味を取り戻すことを目的とする。実在人物の固有名は文学テキストと歴史的現実とを結ぶ鍵となる。ブルーストの草稿には決定稿よりも多くの実在の固有名が含まれており、執筆年代を推定することによって作品の「内」と「外」を実証的に関係づけることが可能となる。報告者が作成した索引に基づき、平成22～24年度科学研究費補助金(基盤研究(C))「草稿資料に基づくブルーストと同時代文学事象の研究」、課題番号22520312)によって文学分野における受容研究を遂行した。

2. 研究の目的

マルセル・ブルースト(1871～1922)の大作『失われた時を求めて』(1913～1927)は文学・芸術論の小説化と見なせるほどに、多くの実在の芸術家への言及・暗示・批評が含まれている。本研究では音楽受容と小説創造の関係を焦点を当て、草稿や書簡の調査・分析に基づき、実在の音楽家・音楽作品がいつどのように小説に導入され、いかなる変容を遂げたかを明らかにするとともに、19世紀後半から20世紀初頭にかけての第三共和政時代のフランス、特にパリにおける演奏記録および新聞・雑誌等の音楽批評を調査し、ブルーストの音楽観を音楽批評史・受容史の中に位置づけ相対化することを目的とする。

3. 研究の方法

(1) ブルーストに関して、『失われた時を求めて』、初期作品『楽しみと日々』や未完小説『ジャン・サントゥイユ』、新聞記事、エッセーなどすべての著作物を研究対象とする。実人生の音楽体験を知る上で膨大な書簡の調査は不可欠である。さらには報告者が作成した草稿の固有名総合索引を活用してフランス国立図書館所蔵の全草稿資料の調査を行う。

(2) パリにおける演奏記録を調査するために、『演劇音楽年報』*Les Annales du théâtre et de la musique*を活用する。この年報にはオペラ座をはじめとする各劇場、主要なコンサート・ホールのプログラムが記録されている。さらに「フィガロ」「ル・タン」「ジュールナル」などのパリの有力な新聞、および音楽専門雑誌によって演奏会やオペラ上演についての報告・批評を調査する。

(3) ブルーストの音楽受容にとって重要と思われる作曲家・音楽作品を、ドイツ音楽、フランス音楽、ロシア音楽、古楽という区分に従って個別に調査・分析を進める。

4. 研究成果

(1) 19世紀を通じてドイツ音楽がパリにおいて影響が大きかったことは、当時の演奏会プログラムを調べても明瞭であり、ブルーストも20歳頃のアンケートに好きな音楽家としてワーグナー、ベートーヴェン、シューマンというドイツ人作曲家を挙げている。特にワーグナーとベートーヴェンは、19世紀末から20世紀初頭にかけてパリで最も盛んに演奏され、ブルーストの音楽観の形成においてきわめて重要である。

パリにおけるワーグナー楽劇の上演・演奏記録を調べると、1880年代はコンサートでの抜粋演奏による断片的受容であったが、1890年代からパリ・オペラ座で20年あまりをかけてワーグナーの全作品が上演されるようになる。1900年代からは大衆化が始まり、エリートたちはドビュッシーなど新しい音楽を志向するようになる。パリにおけるワーグナーの栄光の時代とも見なせる1890年代においても、ブルーストのユダヤ系の友人たちの間ではワーグナーのデカダンスと反ユダヤ主義に反発する反ワグネリズムが活発だったことが同人誌『饗宴』の論考などから判明した。ブルーストは小説の中で架空の音楽家ヴァントゥイユのソナタとワーグナーの『トリスタンとイゾルデ』を人間性の観点から同種の音楽を見なしたことは、作家周辺の反ワグネリズムへの反論という意図が隠されていたと考えられる。

『失われた時を求めて』においてワーグナー論が展開されるいわば「批評の場」の変遷を草稿資料に基づいて調査した。オペラ座、コンサート会場など公共の場からピアノあるいはピアノラ(自動ピアノ)を活用する自宅という私的な場へ変更されていくことが確認できる。公的な音楽聴取の場ではむしろ聴衆の反応の描写が主になるのに対して、孤独な場においては音楽に対し

て深い思索を展開する。文学・芸術観における社会的自我と創造に関わる深い自我との区別に対応した場の設定がなされていることがわかる。

(2) 19世紀を通じて交響曲を中心にパリで盛んに演奏されたベートーヴェンは、ワーグナー・ブームのあとの20世紀初頭に再び時代のヒーローとして復活する。ワーグナーのデカダンス的傾向とは対照的に、ベートーヴェンの音楽は「健康」と「生命」の象徴とする言説が多く見られた。ブルーストは1913年頃からベートーヴェンの最晩年の作である後期弦楽四重奏曲を好んで聴くようになり、小説においても同作品群は老いと病を克服する芸術という意味付けがなされる。彼はとりわけベートーヴェンの苦悩で荒廃した顔に注目するが、同時代の彫刻家ブルデルの数多くのベートーヴェンの顔の彫像と無関係ではないだろう。また、これらの天才的な作品の理解に50年がかかったと表明されるが、「50年」は長い時間を表す単なる象徴的な数字ではない。ベートーヴェンの弦楽四重奏曲のパリにおける演奏の記録をたどると、後期弦楽四重奏曲の演奏は1852年の「ベートーヴェン後期弦楽四重奏曲協会」の創設に遡ることがわかる。20世紀初頭のカペー弦楽四重奏団による弦楽四重奏曲演奏会までの期間がまさしく50年であり、事実に基づく数字であることを示した。

(3) フランス音楽に関しては、セザール・フランク、フォーレ、ドビュッシーがとりわけブルーストが好む作曲家たちであった。1902年に初演されたドビュッシーの唯一のオペラ『ペレアスとメリザンド』は新聞紙上で賛否両論に分かれるほど大きな話題となり、多くのドビュッシー信奉者を生みだすが、ブルーストは9年後の1911年にテアトロフォン(電話によるライブ中継)によっておそらく初めて同作を聴き、深い感銘を受けた。『囚われの女』において目覚めたばかりの「私」の耳に届く行商人たちの「パリの呼び声」がドビュッシーのオペラの「しゃべる」ような歌に譬えられる。この場面で引用される台詞が同オペラの複数の個所に由来することに着目し、原文の意味から逸脱しながら、「見出された時」への飛躍を予告する不可逆的時間に対する諦念の表明であることを示した。さらに、引用された台詞是最晩年の1922年夏から秋にかけて作成されたタイプ原稿における余白の加筆であることを確認するとともに、原文との幾つかの相違から記憶による引用であると推定できる。おそらく11年前にテアトロフォンで何度も聴いた『ペレアス』の台詞を記憶によって再構成し、ブルースト独自の意味を包含する創造的引用であると見なせる。

(4) 上記(1)～(3)の調査を踏まえ、ワーグナー『トリスタンとイゾルデ』、ベートーヴェン『フィデリオ』、ドビュッシー『ペレアスとメリザンド』の3つのオペラを受容を、「人間性」という観点から考察した。『トリスタン』に対して「人間的」という形容が与えられていたのに対し、ブルーストはベートーヴェンとドビュッシーのオペラの中の呼吸の場面に注目している(『フィデリオ』の囚人たちの合唱とトリスタンが地下窟から外部に出て息をつく場面)かたや、『トリスタン』が初演された1902年に「フィガロ」紙上で「人間主義」humanismeをめぐり論争が起こり、ブルーストの友人フェルナン・グレーグが象徴派と高踏派を批判しつつ、詩における「人間主義」を主張、「生のための美」を訴える。ここにおいて「人間主義」は「生命主義」と同義であることを確認するとともに、「呼吸」という生命の基本的活動がニーチェやロマン・ロランの言説において象徴的役割を果たしていることに着目した。ブルーストの小説の祖母の死の場面において呼吸が音楽の比喩とともに強調され、ワーグナー楽劇のイゾルデの死の場面が暗示されている。イゾルデの最後のアリアでも「風」と「息」という言葉が意味深く使われ、ワーグナーもブルーストもともに死の場面において「生」の表現を企図したと結論づけた。

(5) ブルーストのロシア音楽受容は、とりわけ20世紀初めにパリで一世を風靡した「バレエ・リュス」(ロシア・バレエ団)の活動による。1910年以降ブルーストはたびたび「バレエ・リュス」の公演を観ているが、なかでも1913年に初演されたストラヴィンスキーの画期的かつ前衛的な『春の祭典』をどのように捉えたかは興味深い。新聞・雑誌等の批評記事の調査によると、当初は批判された同作が半年後には特に音楽面の新しい価値が認められていくことが確認できる。書簡にわずかながらの言及をもとに、ブルーストが匿名で書いた新聞記事において、刊行されたばかりの『スワン家のほうへ』についてのジャック＝エミール・ブランシュの書評と同人による『春の祭典』論を並置していることに注目した。両作は一見大きく異なるが、大衆にすぐに理解されない天才性、従来のジャンルに収まらない形態的独創性、および匿名性あるいは反個人主義など両作に共通した特徴が認められ、ブルーストが自身の小説作品と『春の祭典』との親近性を認めていたであろうと推測できる。

(6) 19世紀末から20世紀初頭にかけて、ルネサンス時代および17・18世紀のバロック時代の古楽が見直され復活した。セザール・フランクの音楽教育理念を引き継いで創設された新しい音楽学校「スコラ・カントルム」、古楽を好んだ芸術庇護者ポリニャック大公妃のサロンにおける演奏会活動、ブルーストの友人レーナルド・アーンによるリュリヤラモーのオペラ抜粋演奏などにより「昔日の音楽」が徐々にパリの聴衆に広まった。ブルーストの小説においても古い家系の大貴族シャルリュス男爵が古楽愛好者と設定されているのもそのような時代の反映と見なせる。他方、同時代にドビュッシー音楽の影響のもと独立音楽協会が設立され、新しい音楽をめざすドビュッシー信奉者と古い音楽の伝統を重んじるスコラ・カントルム関係者の間で起こった和声か対位法かという論争に着目したうえで、『囚われの女』の「パリの呼び声」の挿話におけるドビュッシーとラモーの類縁関係の確立は、両陣営の対立の解決・止揚であると結論づけた。

(7) 2019年9月にフランス人研究者2名と日本人研究者11名を招聘して国際シンポジウム「ブルーストと受容の美学」を大阪大学で開催し、フランス語により発表・討論を行った。2020

年には上記の研究成果を含む単著『プーレスト 受容と創造』(大阪大学出版会)を上梓した。また、本研究を始める直前にパリで開催されたシンポジウム「プーレストと音楽」に基づく著書へ寄稿を依頼された。さらに、2021年5月に東京でオンラインにより開催された国際シンポジウム「プーレストと諸芸術」においても音楽部門の発表を担当するなど、本研究の成果を国際的に発信した。他方、日本ワーグナー協会関西支部での講演、フランス文学とオペラの共同研究への参加依頼など、音楽学研究者との意見交換・交流も盛んに行うことにより、文学と音楽の学際的研究に対しても貢献している。

(8)今後の課題として以下の研究を予定している。プーレストの小説に登場する架空の音楽家ヴァントウイユの生成過程について再考したい。特にその作品である「ソナタ」が前衛的な作風に変る時期に関して、1913年という定説に疑問を持っており、1910~13年頃のプーレストの音楽体験と小説の執筆状況を詳細に調査することを企図している。また、既にかなり調査しているものの論文として発表していないセザール・フランクやガブリエル・フォーレの音楽の受容、さらには、友人の音楽家レーナルド・アーンの新聞評論の収集をこれまでもかなり進めているが、近年盛んに行われている同音楽家の多領域にわたる総合的な研究の成果を踏まえながら、プーレストとの関係を再考したい。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計10件（うち査読付論文 8件 / うち国際共著 2件 / うちオープンアクセス 7件）

1. 著者名 和田章男	4. 巻 39
2. 論文標題 ブルーストと音楽受容 人間的な、あまりに人間的な	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 STELLA	6. 最初と最後の頁 93-118
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 和田章男	4. 巻 38
2. 論文標題 ブルーストと『春の祭典』	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 STELLA	6. 最初と最後の頁 1-21
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 和田章男	4. 巻 38
2. 論文標題 国際シンポジウム「ブルーストと受容の美学」	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 STELLA	6. 最初と最後の頁 93-100
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 和田章男	4. 巻 59
2. 論文標題 国際シンポジウム「ブルーストと受容の美学」報告	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 GALLIA	6. 最初と最後の頁 89-90
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 和田章男	4. 巻 59
2. 論文標題 ブルーストとベートーヴェン受容	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 大阪大学大学院文学研究科紀要	6. 最初と最後の頁 91-124
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 和田章男	4. 巻 37
2. 論文標題 ブルーストとモネの睡蓮画 ヴィヴオンヌ川の睡蓮の場面をめぐって	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 STELLA	6. 最初と最後の頁 193-211
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 和田章男	4. 巻 48
2. 論文標題 Cecile Leblanc, Proust ecrivain de la musique : l'allegresse du compositeur	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 Bulletin d'informations proustiennes	6. 最初と最後の頁 189-191
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1. 著者名 和田章男	4. 巻 36号
2. 論文標題 ブルーストとワーグナー受容 啓示としての『パルジファル』	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 STELLA	6. 最初と最後の頁 85 - 99
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 和田章男	4. 巻 40
2. 論文標題 『ブルーストの音楽』 プルーストと音楽をめぐる最新研究の動向	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 STELLA	6. 最初と最後の頁 83-92
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 和田章男	4. 巻 6
2. 論文標題 Proust et la critique nervalienne	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Revue Nerval	6. 最初と最後の頁 119-134
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

〔学会発表〕 計10件(うち招待講演 3件/うち国際学会 2件)

1. 発表者名 和田章男
2. 発表標題 Proust et Le Sacre du Printemps
3. 学会等名 国際シンポジウム「プルーストと受容の美学」(国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 和田章男
2. 発表標題 プルーストと音楽受容
3. 学会等名 大阪大学文学研究科・最終講義
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 和田章男
2. 発表標題 文学と音楽が出会うとき フランス人作家によるベートーヴェン受容
3. 学会等名 大阪大学文学部・文学研究科同窓会講座（招待講演）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 和田章男
2. 発表標題 ブルーストとドビュッシー
3. 学会等名 関西ブルースト研究会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 和田章男
2. 発表標題 ブルーストとワーグナー批評
3. 学会等名 関西ブルースト研究会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 和田章男
2. 発表標題 ブルーストとベートーヴェン受容
3. 学会等名 関西ブルースト研究会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 和田章男
2. 発表標題 ブルーストと昔日の音楽
3. 学会等名 日仏会館主催国際シンポジウム「ブルーストと諸芸術」(招待講演)(国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 和田章男
2. 発表標題 ブルーストとワーグナー受容 人間的な、あまりに人間的な
3. 学会等名 日本ワーグナー協会関西支部例会(招待講演)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 和田章男
2. 発表標題 ブルーストと音楽についての研究動向
3. 学会等名 関西ブルースト研究会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 和田章男
2. 発表標題 ブルーストのオペラ受容 人間的、あまりに人間的
3. 学会等名 青山学院大学総合研究所共同研究プロジェクト「19・20世紀フランス文学とオペラ」研究会
4. 発表年 2022年

〔図書〕 計4件

1. 著者名 和田章男	4. 発行年 2020年
2. 出版社 大阪大学出版会	5. 総ページ数 393
3. 書名 ブルースト 受容と創造	

1. 著者名 Akio Wadaその他	4. 発行年 2020年
2. 出版社 Hermann	5. 総ページ数 451
3. 書名 Musiques de Proust	

1. 著者名 和田章男、岩根久、柏木隆雄、金崎春幸、北村卓、永瀬春男、春木仁孝、山上浩嗣	4. 発行年 2020年
2. 出版社 朝日出版社	5. 総ページ数 393
3. 書名 フランス文学小事典（増補版）	

1. 著者名 吉川一義編	4. 発行年 2022年
2. 出版社 水声社	5. 総ページ数 377
3. 書名 ブルーストと芸術	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計1件

国際研究集会 ブルーストと受容の美学	開催年 2019年～2019年
-----------------------	--------------------

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------